

技術室に期待

技術室運営委員会委員長
地震予知研究センター
教授 住友 則彦

今から30年以上も前、地震予知計画が始まった頃の地震観測は地震計はむろん、レコーダーなど観測機器のほとんどが手作りでした。観測の精度や保守の難易は技官による工作技術の功績にかかっていたと思います。研究者も技官も時間を忘れて創意工夫に夢中になったと聞いております。地殻変動連続観測においても全く同じ事が言えます。しかし、30年の年月は、エレクトロニクスの発展、情報処理技術の驚異的な進歩等が相伴って、ある意味で技官の立場を揺るがすものになりました。研究者も同様に情報科学の進歩についてゆけないものは、専門の地球科学にも遅れをとる結果を招いているとも言えます。確かに時代の潮流は有ります。その流れに身を任すか、あるいは自分の意思で泳ぎ切るか、それぞれの考え次第と思いますが、私は他者に責任を求めるのは情けないと思います。結局は自分の納得の出来る道を選ぶべきだと思います。

さて現在ではどのような観測や実験でもデータの取得量はまさに飛躍的に増大しました。処理能力も30年前とは天と地の開きがあります。だからと言って、研究成果が飛躍的に増大したとは必ずしも言えません。その原因は情報の質や量の問題の前に、どのような情報が欲しいか、そのための観測・実験方法はどのようにするのか等の評価を怠ってきたからかもしれません。残念ながら、STS地震計もGPS測位計もすべて海の向こうからもたらされたハイテク器機です。これは研究者の発想の貧困も有るでしょうが、技術者の技術力高度化への努力が不足していたことも有るかもしれません。とにかく我々は、研究者も技術者ももっともっと情報交換を密にして、常に技術革新へどん欲でなければならないと思います。

まもなく創立50周年を迎える防災研究所はある意味で先に述べた時代の潮流をどう乗り切るかの選択を迫られています。大学独自の道を歩むか、社会との融和を計る道をとるか、とにかくバールを取って顔を見せなければならない局面に立たされています。4年後に出来た技術室、大幅なメンバー交代が目の前に迫っています。これからの技術室が何を指すかは、防災研がどのような道を選択するかにかかっています。技術室運営委員会では発足以来これらの問題を常に頭に置きながら、技術室の運営に助言・提言を行ってきましたが、まだまだ問題の掘り下げが不十分であることを痛感しています。このたび技術室で刊行される「技術室報告」が、単なる業務報告に終わらず、次のステップへの大きな弾みになるよう期待してやみません。